日本ロシア文学会第 61 回研究発表会
報告要旨（予稿）集

A01　中野　幸男　ギェドロイツとタミズダート―亡命ポーランドにおけるロシア文学出版
A02　関　岳彦　ブロツキー初期作品の研究
A03　宮川　絹代　「胎内的なもの」というイメージ：ブーニン文学の恋愛を読むために
A04　奈倉　有里　サーシャ・ソコロフ『ばかの学校』のレアリア
A05　前田　しほ　戦争という記憶の語りについて：アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』証言集，映画，演劇をめぐって
A06　籾内　裕子　芥川龍之介によるトルストイ受容―『イワン・イリイッチの死』読書から「蜘蛛の糸」「枯野抄」執筆まで
A07　山路　明日太　「光」と「闇」からみたゴーリキー―『イゼルギリ婆さん』を中心に
A08　秋月　準也　『巨匠とマルガリータ』における「家」と「アンチ家」―ロトマンの作品解釈をめぐって―
A09　石原　公道　ビートコフは何処に？
A10　小澤　裕之　オベリウ以前のハルムスの詩学
A11　平賀　雄　イサーク・バーベリ『騎兵隊』における登場人物：作品と日記との間
A12　古川　哲　『幸せなモスクワ』における身体毀損―プラトーノフにおける身体・空間把握の変遷
A13　越野　剛　ナポレオン戦争におけるマロース（冬の寒さ）の表象
A14　山下　大吾　『エヴゲーニイ・オネーギン』における西洋古典―散文をめぐる「抒情的逸脱」を中心に
A15　高橋　知之　描かれない夢―1840 年代のドストエフスキー作品について
A16　坂中　紀夫　『未成年』における理念の無矛盾性について
A17　加藤　純子　アレクセイ・カラマーゾフの瞑想と「糸」の比喩：日本的概念「縁」との対照
B01　コベルニック・ナディヤ　ロシア語における“Vt sebya”と“Vt -sya”の対応性について
B02　恩田　義徳　古代教会スラブ語および古代ロシア語の分詞の誤用について
B03　シャトヒナ・ガンナ　Инновации в преподавании РКИ (разработка урока по теме «Телефон»)
B04　クロチコフ・ユーリー　ヨーロッパの教育機関におけるバイリンガル生徒への実践的教育
B05　ペトリシチェヴァ・ニーナ　Russian Phatic Interjections: Development and Functions
B06　福安　佳子　ロシア語命令法における命令動作の動作主 ―『イワン・デニーソヴィッチの一日』の中で―
B07　村越　律子　命令文とモダリティ
B08　世利　彰規　ロシア語の間接話法における de dicto のモダリティ
C01　一柳　富美子　声楽作品におけるグリーンカの「保守性」～同時代のアリャービエフ，ダルゴムィーシスキイとの比較を通して～
C02　上田　洋子　絵画から演劇へ ―ニコライ・タラブーキンのメイエルホリド論
C03　河村　彩　生産主義の広告論とロトチェンコのグラフィックデザイン
C04　中堀　正洋　異教神ヴォロスの月神としての一機能
C05　塚田　力　アレクサンドル・ブロークと古儀式派：『十二』における救世主の呼称をめぐって
W-1　**ワークショップ**　Карнавал революции: гротеск и советская культура 1920 – 1930-х годов（村田真一，イチン・コルネーリヤ，グレチコ・ヴァレリー，楯岡求美）
W-2　**ワークショップ**　ロシア文学研究の先駆者，昇曙夢を語る（和田芳英，中本信幸，源貴志，籾内裕子，南平かおり）
W-3　**ワークショップ**　いま，ソ連文学を読み直すとは（野中進，安井亮平，中村唯史，岩本和久，平松潤奈）

日本ロシア文学会

2011 年 9 月

Abstracts of Research Papers Accepted for Presentation at the 61th Annual Assembly of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

A01	Ю. Накано	Гедройц и тамиздат: издание русской литературы в Полонии.
A02	Т. Сэки	Творчество И. Бродского раннего периода.
A03	К. Миягава	«Утробность» в творчестве И. А. Бунина о любви.
A04	Ю. Нагура	Советские реалии в романе Саши Соколова «Школа для дураков».
A05	S. Maeda	On the Narrative of Memories of War: Comparison of the Book of the Oral History, Films and Theaters of "War's Unwomanly Face" by S. Alexiyevich.
A06	Ю. Момиути	Восприятие произведений Л. Н. Толстого Акутагавой Рюносукэ – От чтения «Смерти Ивана Ильича» до созданий «Паутины» и «Карэно-сё».
A07	А. Ямадзи	М. Горький через призму света и тьмы.
A08	Д. Акидзуки	«Дом» и «Антидом» в романе «Мастер и Маргарита» – Об одном трактате Ю. Лотмана.
A09	К. Исихара	Какое место занимает Битков?
A10	Х. Одзава	Поэтика Хармса дообэриутского периода.
A11	Ю. Хирага	Персонажи в «Конармии» И. Бабеля: между сочинением и дневником.
A12	A. Furukawa	Injured Woman in «Happy Moscow»: Changing Experience of Human Body and Space in the Works of Andrei Platonov.
A13	G. Koshino	Representations of «Cold» War against Napoleon in Literature and Caricature.
A14	Д. Ямасита	Античная литература в «Евгении Онегине», в частности, в его лирическом отступлении о прозе.
A15	Т. Такахаси	Ненаписанные мечты – о сочинениях Достоевского 1840-х годов.
A16	Н. Саканака	О последовательности идеи в романе Достоевского «Подросток».
A17	Д. Като	Размышления Алексея Карамазова и образное выражение «нити»: сопоставление с японским понятием «эн».
B01	N. Kobernyk	An Analysis of Degree of Correspondence of "Vt sebya" and "Vt -sya" in Russian.
B02	Y. Onda	An Analysis of the Misuse of the Participle in Old Church Slavonic and Old Russian.
B03	Г. Шатохина	Инновации в преподавании РКИ (разработка урока по теме «Телефон»).
B04	Ю.Клочков	Практическая подготовка билингвальных учащихся в немецких европейских учебных заведениях.
B05	N. Petrishcheva	Russian Phatic Interjections: Development and Functions.
B06	Y. Fukuyasu	The Agent of the Action in Gulag Directives.
B07	R. Murakoshi	Imperatives and Modality.
B08	А. Сэри	Модальность «об сказанном» в косвенной речи русского языка.
C01	F. Hitotsuyanagi	"Conservatism" of Glinka's Vocal Works — In Comparison with Contemporaries: Aljab'ev and Dargomyzhskij.
C02	Й. Уэда	От живописи к театру: Николай Тарабукин о театре Мейерхольда.
C03	А. Кавамура	Рекламная теория продуктивистов и графический дизайн Родченко.
C04	М. Накахори	О функции языческого бога Волоса как лунного бога.
C05	Ц. Цукада	А. Блок и старообрядчество: о имени Спасителя в поэме «Двенадцать».
W-1	**Workshop**	Карнавал революции: гротеск и советская культура 1920 – 1930-х годов. (С. Мурата, К. Ичин, В. Гречко, К. Татэока)
W-2	**Workshop**	О Нобори Сёму, первопроходце в изучении русской литературы в Японии. (Й. Вада, Н. Накамото, Т. Минамото, Ю. Момиути, К. Нанпей)
W-3	**Workshop**	Soviet Literature Revisited. (S. Nonaka, R. Yasui, T. Nakamura, K. Iwamoto, J. Hiramatsu)

JASRLL
September 2011

【A01】ギェドロイツとタミズダート—亡命ポーランドにおけるロシア文学出版

中野　幸男

1960 年代の亡命ロシアのタミズダートの中心的出版社はパリの亡命ポーランド出版社 Instytut Literacki であった。出版者イェジー・ギェドロイツを中心に，シニャフスキー，ダニエル，ブロツキーなどの地下出版物を雑誌 Kultura などにポーランド語およびロシア語で出版すると共に，ロシア側に対してポーランド作家ゴンブローヴィチのロシア語での出版提案なども逆に行われた。フリーダ・ヴィグドロヴァにより密かに書き取られたブロツキーの裁判記録や彼の詩，シニャフスキーが『おやすみなさい』で小説中に語ったエレン・ザモイスカヤに渡した原稿が実際に出版されるまでの経緯などを，主にグレープ・ストルーヴェ，ボリス・フィリッポフなどのギェドロイツとの書簡やポーランド語で刊行されたギェドロイツの回想録や書簡集，またシニャフスキーの原稿出版時にステファン・ベルグホルツの偽名で序文を書いたアレクサンダー・ワットに関する研究と合わせながら検討する。

1964 年のブロツキーの裁判と 1966 年のシニャフスキーの裁判は，レニングラード／モスクワ，フルシチョフ／ブレジネフ体制，罪状や服役期間の差などにより，フランス知識人の介入による国際的文学裁判，亡命後の文学裁判の伝説化，亡命後の彼らの国際的作家活動などを考慮してもなお，並べて取り上げられる事件ではなかった。シニャフスキー，ブロツキーの出版経緯を追いながら浮かび上がってくるのは，彼らの作品がギェドロイツにより『Kultura』に出版されたという事実は，彼と交流のあった亡命ロシアの代表的雑誌『Grani』やアメリカの『New Leader』の出版人との関係を含むタミズダートのネットワークの一部として同時代的に捉えられるということである。ストルーヴェとフィリッポフの出版活動に着目するなら，ストルーヴェ（サンフランシスコ）やフィリッポフ（ニューヨーク）とギェドロイツ（パリ）の線の背後にモスクワ，レニングラードやワルシャワ，フランクフルト・アム・マインなどの他の都市とつなぐネットワークが浮かび上がる。亡命ロシア文学の出版活動はその後の 20 世紀ロシア文学研究の素地を創り出したものの，これまで亡命ポーランド出版が果たした役割が詳細に考察されることは稀であった。ギェドロイツと彼の周囲に焦点を絞りながら考察する。

（なかの　ゆきお，日本学術振興会）

【A02】ブロツキー初期作品の研究

関　岳彦

ヨシフ・ブロツキーの創作のエッセンスは初期のころに形成されたという指摘がある一方，今日に至るまで，ブロツキーの初期作品の本格的な研究は数少ない。本報告は，分析した初期の三作品に現れた，後まで続く創作のエッセンスと，1950～60 年代のソ連という現実がブロツキーの創作に与えた影響を考察するものである。

62 年の詩『はずれから中心へ』の中心的なモチーフである「移動」は，ソ連という停滞した嘘の世界から，自由の国のジャズに導かれて真実の世界へと脱出するという意味を持つが，これは同時に，ブロツキーが生涯恐れた「同語反復」を克服しようという試みでもある（また過去の文学の伝統を思わせる表現が散見されるのは，ソ連によって抹殺されてきた伝統を自らが継承しようという決意表明を意味していると思われる）。

しかし，移動は反復の解決策としては不十分であった。『丘』（1962）で，どれだけ移動を続けても，当時ブロツキーが関心を寄せていたヒンドゥー教の「輪廻」という反復を抜け出せないという「移動の限界」という結論にブロツキーは達する（また東洋思想のほかにも，この詩はユダヤ性というブロツキー研究でしばしば見落とされる要素が見られる点で興味深い作品である）。

この移動に代わってブロツキーが見出したのは，「文学」の力である。『ゾフィア』（1962）の，謎めいた警告を無視して生きる主人公の姿は，国家の脅迫を無視して詩作を続ける若き日の詩人の姿を思わせるもので，詩人としての自覚を示すと同時に，文学への絶対的信頼という後の「言語崇拝」という思想の萌芽であると考えられる。更に，この詩の振り子の運動のようなモノトーンな韻律は，詩によって時間と一体化するという後のブロツキー作品のアイディアを先取りするもので，空間の移動に代わって時間との一体化を可能にする文学に，ブロツキーは救済の力を見出したのだと言える。

ブロツキーの初期作品は，ソ連という現実を逃れようという試みに始まり，ジャズや移動という反復克服の試みを経て，「言語崇拝」というブロツキーの言語観，文学観につながる，文学への絶対的な信頼を見出すという若き詩人の軌跡を示している。これはつまり，「時間に対する言語の優位」というブロツキーの考え方が，しばしば言われるようにオーデンから着想を得たものではなく，ソ連という現実を生き，詩人になる過程で獲得されたのだと言うことができるのである。

（せき　たけひこ，東京大学院生）

【A03】「胎内的なもの」というイメージ：ブーニン文学の恋愛を読むために

宮川　絹代

ブーニン文学は視覚的であるとしばしば言われる。実際,その作品世界の視覚イメージは詳細,かつ鮮やかで,こうした指摘に異論の余地はない。しかし，視覚的であることは，必ずしも可視イメージによって完結するということではない。あらゆる現象がよく見えるからこそ，視覚の主体は，見えないものがあることに気づき，動揺し，それに囚われる。「すべてが見える」作家と言われるブーニンを，見えないものを追いかける作家として，改めて捉え直すことで，その文学の本質的特徴や文学史の中における位置が見えてくるはずである。

不可視のものが顕著に現れているのは，恋愛をテーマとした作品群である。恋愛は，ブーニン文学の中心的テーマの一つであるが，その大きな特徴は，制御できない激しい感情を伴いながら，継続することはないという点にある。それは，殺人や自殺といった死に終わることが多く，読者に哲学的な問題を投げかける。けれども，ブーニン文学においては，イメージが思想に先行する。恋愛の非持続性や死との関係についても，イメージから，特に可視不可視という視覚を軸にしたイメージから検討するべきである。

ブーニンは,恋愛をテーマとした作品を執筆しながら,女を描き出すことに心を砕いている。そして，作品を紐解けば，体や衣服の色彩や形，質感までが緻密に描写された女の可視イメージに出会う。けれども，ブーニンが模索したのは，そうした可視イメージが宿す，見えない何かを表すことである。ブーニンは，この見えないものを «утробность»「胎内的なもの」と表現する。これは，内的なものでありながら，精神的なものではなく，«утроба»「腹」と結びついた，具体的で肉体的なものである。見えないものを追い求めながらも，抽象的な概念に向かわず，あくまでも見えるものから眼をそらすことのなかったブーニン文学の重要な特徴をなすのが，この「胎内的なもの」なのである。『軽やかな息』,『日射病』,『モルドヴァ風サラファン』,『エラーギン少尉の事件』,作品集『暗い並木道』の諸作品など，数多くの恋愛をテーマとした作品の中に現れた「胎内的なもの」という不可視のイメージに注目し，一貫して視覚という観点から作品を読むとき，ブーニン文学の恋愛は，可視と不可視の間で繰り広げられる，視覚のドラマとして浮かび上がってくる。

（みやがわ　きぬよ，東京大学）

【A04】サーシャ・ソコロフ『ばかの学校』のレアリア

奈倉　有里

『ばかの学校』の時代設定について A.ゾーリンは，1950 年代後半だろうと指摘している。しかし研究全体としては，具体的な時代背景やレアリアはあまり重視されてこなかった。確かにこの小説においては史実自体が特に重要な役割を果たしているわけではないのだが，細かい部分を見ていくと，1950 年代後半のモスクワ郊外という設定に，非常に忠実なレアリアが織り込まれていることがわかる。

まず,ロシア文学の先生が語り手に薦める数冊の本は,1950 年代，表紙に「小学生向け」として大部数で発行されていた本ばかりであり，当時の模範的教育方針に一致する。それを裏づける資料として 1957 年のピオネール手帖を確認すると，小説に登場する文学の先生の言葉と一定の平行関係にある。鉄道の運賃からは，舞台が 1960 年の貨幣改革以前だということ，速度からは，1950 年代後半に動力の切り替えが行われ，運行速度が上がってくる時期以降であることがわかる。

舞台についてソコロフ自身は，モスクワ郊外全般を指す架空の場所だと主張している。だがほぼ全ての条件が小説内の記述とあてはまる土地がある。北方路線の第五地区にあるイクシャだ。駅前の池，転轍機，駐在所，防火水槽，りんご園などのレアリアも食い違うところがない。1950 年代の地域新聞を調べると，小説のように，夏休みにはイクシャ駅の裏手にあった休息の家やダンス・ステージで子供用イベントが開かれていた。また「イクシャ」は，フィン・ウゴル系の言葉で「川」を指す。『ばかの学校』の駅も川と同じ名前だったことが仄めかされているが，ロシア内の少数言語には，現代でもこの意味がそのまま受け継がれている言葉があり，それはマリ語だ。ソコロフはこれを書く直前にマリに住み，マリ語の詩の露訳を担当した経験があり，この語を知っていた可能性が極めて高い。だが「架空の郊外」と強く主張する作者の意思を汲んで，これはあくまでも仮説に留める。

さらに，この小説に登場するトラフテンベルクの別名ティンバーゲンが，動物行動学者ニコラース・ティンバーゲンを指していることは，ほぼ明らかである。彼は『ばかの学校』執筆期間に当たる 1973 年に，ノーベル賞を受賞し，自閉症児研究をしている。ティンバーゲンの著書とソコロフの小説には，いくつかの興味深い一致が見られる。しかし影響関係についてはより丁寧に調べる必要があり，今後の課題となる。

（なぐら　ゆり，東京大学院生）

【A05】戦争という記憶の語りについて：アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』証言集，映画，演劇をめぐって

前田　しほ

大祖国戦争を題材とする「戦争文学」はソ連の公式文学の王道として展開した。戦後の戦争表象は記念化という方向でソ連の覇権主義と国民化の運動に利用される一方で，タブーを孕む微妙な問題として，当局との葛藤の歴史をもつ。口当たりのよい美談から切り落とされたトラウマ的経験や，些細な経験を描いた作品が民衆の支持を得る。しかしその一方で，戦争を脱神話化した作品が，時を経ると，新しい神話と化する現象も見られる。

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』（1985 年）は，女性兵士というそれまで黙殺されてきた存在に注目し，彼らの個人的経験に焦点を置いて証言集を編んだ。さらにこの作品を基に，映画や演劇が製作された。また 2008 年には，改訂版が出版され，新しい序文が付け加えられたほか，初版時含まれなかった衝撃的な内容が新たに加わった。本報告では，証言集における記憶の語られ方，映画・演劇における記憶の演出の仕方，また改訂版における作家がかっての仕事について語る際の記憶，入れ子のように複雑な記憶の語られ方について考察する。さらに，アレクシエーヴィチ作品が社会の中にいかに受け入れられ，新しい神話となりえたのか，私的な記憶を公的な場所で語ることの意味を考えることで，文学と公共圏の問題についても議論を発展したい。

（まえだ　しほ，北海道大学）

【A06】芥川龍之介によるトルストイ受容―『イワン・イリイッチの死』読書から「蜘蛛の糸」「枯野抄」執筆まで

籾内　裕子

1894 年にポール・ケーラスが米国の雑誌«The Open Court»に発表した仏教説話 «Karma»をトルストイはすかさずロシア語に訳している。後，«Karma»にケーラスが手を入れ単行本として 1895 年に初版刊行，さらに 1896 年の第二版を 1898 年に鈴木大拙が邦訳，それを元に芥川が「蜘蛛の糸」（1918 年）を執筆した。底本に異同があるとはいえ，同じ素材に東西の作家が反応していることは興味深い。«Karma»の骨子となる教えは「悪行を行った者はその結果を次の生でその身に受けなければならないが，改心して«self»を断ち切れば自他利生の源となることができる」というものである。トルストイはこの主張を福音書に通じるものとして，さらに自身がものした『人生論』とも響き合う主張として受容している。宗教の枠を越え人としてのあり方を読みとっているのである。一方芥川は，教訓を前面に出した原作を文学作品として高度に洗練すると同時に，彼自身の考える「エゴイズム」の形を織り込んでおり，原作の教えをそのまま再現することには拘らなかった。

芥川は生涯を通じて「エゴイズム」を描き続けた作家であるが，彼が「エゴイズム」と正面切って向き合ったことが表現されたのは「イゴイズムをはなれた愛があるかどうか」と記した書簡（1915 年）であろう。結婚を養父母に反対され断念した頃の書簡であるが，当時芥川はトルストイの「イワン・イリイッチの死」を読み進めていたのである。さらに 1916 年には師夏目漱石が死去，芥川は「葬儀記」（1917 年）を著している。こういった経験が反映されたのが「枯野抄」（1918 年）である。しかし，トルストイが死に行くイワン・イリイッチ本人の自意識に潜行していくのに対し，芥川は芭蕉の周りに集まる弟子のエゴイスティックな自意識を解剖する事に重きを置いた。「死の情景」を描きながら，両者の視線は対称的なベクトルを描いている。

トルストイは，人間はいかに生きるべきかを追求した『人生論』『イワン・イリイッチの死』の同一線上に«Karma»を置いていた。芥川は「エゴイズム」をキーポイントとして『イワン・イリイッチの死』と«Karma»を読み解き，「蜘蛛の糸」と「枯野抄」へ発展させた。一生を通じてトルストイに対する複雑な親近感と反発を表明していた芥川の，初期におけるトルストイ受容の一面である。

（もみうち　ゆうこ，早稲田大学）

【A07】「光」と「闇」からみたゴーリキー―『イゼルギリ婆さん』を中心に

山路　明日太

ゴーリキーの作品群のなかでも『イゼルギリ婆さん』のダンコの物語，とりわけそのクライマックスは鮮烈な印象をのこす。民衆とともに暗黒の森をさまようダンコは，みずからの心臓をつかみとり，光かがやくそれを灯火のようにかかげ，森から人びとを導き出すのだ。執筆当時の社会状況と作者の実直な性格とを考慮するならば，ここには不公正なロシア社会を変革し，自由へと民衆を駆りたてようとする作者の意図が存分に発揮されているといえよう。旧ソ連時代を中心に従来この小説は，そうした作者の含意に注目し，革命への社会的気運とのつよい関連のなかで批評されてきた。だが，ゴーリキーが文学に生きる決意をこめて書いたこの小説には，かれの小説家としての気概が，なによりも物語における充溢したイメージ表象のなかに反映されている。

ダンコのクライマックスで象徴的にもちいられている光と闇の対立的なイメージは，実は，小説の構成全体にまでおよんでいる。小説の冒頭，イゼルギリの物語が語られるよりもまえに，影の描写によって幻想的な雰囲気がつくりだされている。またラルラにせよダンコにせよ，イゼルギリがかれらについての物語を語りはじめるのは，いずれも周囲の景色にみとめられた闇と光の反射が発端となっている。しかもすでにこの時点で，両主人公の個性を反映するかのように，それぞれの情景は対照的な性格を担わされている。この小説では光と闇の情景描写が，イゼルギリの物語内容と象徴的な対応関係をもっている。

本発表では，『イゼルギリ婆さん』にあらわれた光と闇のイメージを子細に考察していく。そのことによって個々のイメージがどのような意味をもたされているか，作品全体のなかでいかなる位置づけを担っているか，読み解いていくことになる。ところで，ダンコのクライマックスでみられたような，陰鬱な闇の世界と幸福な光の世界との分裂，および闇の世界から光を憧れる叙述といったものは，ゴーリキーの初期作品群を中心にいくつも言及されている。したがって発表では，『マカール・チュドラー』『二十六人と一人』『嘘つきの鶸と真理の愛好者―啄木鳥の話』『鷹の歌』『読者』『盲人の歌』などを適宜とりあげることになる。

（やまじ　あすた，中京大学）

【A08】『巨匠とマルガリータ』における「家」と「アンチ家」―ロトマンの作品解釈をめぐって

秋月　準也

記号論研究の指導的地位にあったユーリイ・ロトマンは晩年に自らの理論をさらに発展させた空間的記号論（記号圏論）を提唱し，それをまとめた著書『思考世界の内側で』（*Ю. М. Лотман.* Внутри мыслящих миров. M., 1996.）を出版した。彼はその本の十数頁ほどを割いてブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』を「家（дом）」と「アンチ家（антидом）」に分けつつ，それらの表象のされ方と役割について考察している。今回の発表の目的は，まずこのロトマンの論文についてその是非も含めて詳しく検討し，さらにこの論文に対する後の研究者の発言もたどりながら，あらためてブルガーコフ研究の中での彼の論文の位置づけをはかるものである。

ロトマンによると，ロシア文学の普遍的なテーマの中で大きな場所を占めているのは「家」（自分の，安全な，文化的な，庇護者である神に守られている場）と「アンチ家」，「偽の家」（自分のではない，悪魔的空間の，そこにいたるのが死後の世界への旅と等価であるような一時的な死の場）との対比である。そしてこのような伝統がブルガーコフにとっては極めて重要であり，「家―アンチ家」という表象は彼の創作全体にわたる構成的表象体系の一部をなすとしている（Лотман. С. 265.）。ロトマンの見るブルガーコフ的な「家」空間は文化，芸術，創造といったイメージと常に結びついているものであって，それらのイメージは対置される「アンチ家」的な空間との間を行き来することでさらに増幅されるのである。

このようなロトマンの一連の考察は，地下室から精神病院を経て，最終的に永遠の家を手にする巨匠の運命をうまく説明できていると言えるだろう。しかし芸術空間が「家」にのみ限定されれば，「アンチ家」のなにも生み出さない非創造的特性を強調し過ぎることにもなってしまう。実際には『巨匠とマルガリータ』でブルガーコフは「アンチ家」自体から創造性をすべて排除しているわけではない。とすれば，むしろ「家―アンチ家」の境界は断絶しておらず，その間に段階的な創造的空間が広がっていると捉えた方がよいのではないだろうか。

（あきづき　じゅんや，北海道大学院生）

【A09】ビートコフは何処に？

石原　公道

А.Варламов.《Михаил Булгаков》－М.: Молодая гвардия, 2008.は注 1434 項目，10 頁の年譜と 4 頁の参考文献という大著 840 頁。その内容はユニークな部立てで「第一部　タチヤーナ」「第二部　リュボーフィ」「第三部　エレーナ」とは，三度の結婚の妻たち。タチヤーナ・ラッパー（アクセントは最後，49 頁で強調されていた）との離婚が 1925 年 3 月，父方母方聖職者の祖父たちから伝記を始めてここまで 12 章。再婚リュボーフィ・ベロゼルスカヤとの生活で 7 章，1932 年 10 月から，未亡人となったエレーナとの，彼女は日記を残したが，その記事を中心にしての 10 章，というもの。現在ではほぼ 60 年にも及ぼうかというブルガーコフ研究史において，かなりユニークな評伝と言えるのだが，特徴的な文体による作品解釈について若干の異義無しとはしない。

今回の発表では特に第三部 6 章〈Пятый пункт〉を取り上げて，スターリン治下の 1930 年代半ばにおけるブルガーコフの創作背景に光を当てた部分を検討することが主眼である。

著者はとりわけ，モリエールが主人公の戯曲「カバラ・スヴィトシ」（上演題名「モリエール」）上演中断，それに付随した戯曲「アレクサンドル・プーシキン」（上演題名「最後の日々」）沙汰止みとなった 1936 年を，1929 年の「トゥルビン家の日々，ゾイカのアパート，赤紫島」の 3 篇の上演禁止と比定しその相違を 5 点として数え挙げるのだが，4 点までは異論はない。しかしながら 5 点目とされる，読み取ることがそれほど容易には書かれていない論旨はいかがなものか。戯曲「アレクサンドル・プーシキン」は，私見によれば主人公はプーシキンではなく，しがない時計修理工，プーシキンをスパイしている皇帝官房第三課所属のビートコフである。舞台に登場しないプーシキンを主人公としてこの戯曲を解釈していることで，この伝記作者も他の先行する論者たちの轍を踏んでいると言わざるを得ない。ある時期まで共著者であった敬愛する先輩作家ヴェレサーエフとの対立をヴァルラーモフも丁寧に追ってはいるのだが，敵役ダンテス及びビートコフの形象について，さらにはプーシキンの形象をもブルガーコフの作品の読みに即して再検討してみたい。

（いしはら　きみみち，関東支部）

【A10】オベリウ以前のハルムスの詩学

小澤　裕之

1928 年に公布された有名な「オベリウ宣言」は，ザーウミを自分たちに敵対する流派であるとみなしているが，将来オベリウに所属することになる 1920 年代半ばの若きハルムスにとって，未来派の手法は詩作に欠かせないものであった。

1924 年頃よりハルムスは自他を問わず様々な詩を公衆の面前で朗読する活動を行っており，当時の彼の詩は朗読に向けられたものであったことが知られている。実際，1926 年初頭までの彼の詩には強調符が頻繁に記され，それを基に発声されたことが推察される。それらの詩作品は音を重視し，しばしば意味がなおざりにされた。そのような詩作の支柱となったのが，音声的ザーウミである。辞書にはない造語を用いたザーウミはこの時期のハルムスの詩には多用されており，その作品から何らかの意味を読み取ることは非常に困難である。ただし，このような音声的ザーウミは，時の移ろいに従い次第に減少してゆく。それに代わって増加するのが物語性である。登場人物の働きやストーリーの方向性などが明確になってゆく。しかしハルムスの音声への興味が失われたわけではない。

その証拠に，ハルムスは「豊かな脚韻」を多用している。ときに語呂合わせに転じることも知られている「豊かな脚韻」を用いた彼の詩においては，押韻する単語と単語の音を揃えることが目指されているために意味が閑却され，文脈的な意味のズレが生成される。このとき，言葉の意味をずらす「意味論的ズドヴィーク」が生じているのである。それは滑稽な効果を生み出すだろう。「位置ズラシ」とも呼ばれるズドヴィークは，この時期一貫してハルムスが愛用しており，その詩作の礎とみなすことができる。この未来派の手法＝概念には様々な用法が存在するが，ハルムスの特に好んだのは，上記のような意味論的ズドヴィークである。脚韻というシステムを経ずに，詩行の内部で積極的に意味論的ズドヴィークが行われる例も多数存在する。

こうして，1924 年から 1927 年にかけてのハルムスの詩は，物語より音を重視した極めて難解なものから，音と物語を共に重視したものへと変化しているが，その底流には常に意味論的ズドヴィークが横たわっていたことになる。このような初期ハルムスの詩作のありようを，当時彼が師事し，音声的音楽への志向を表明していたトゥファノフへの接近とそこからの離脱とを絡めて究明したい。

（おざわ　ひろゆき，東京大学院生）

【A11】イサーク・バーベリ『騎兵隊』における登場人物：作品と日記の間

平賀　雄

1920 年代のソ連文学において大きな足跡を残した作家であるイサーク・バーベリの代表作『騎兵隊』を取り上げ，彼の創作上の手法やその特徴を考察する。

『騎兵隊』とは，1923 年から 25 年に掛けて雑誌・新聞に発表された短編群を，1926 年に一冊の単行本にまとめたものであり，1920 年のソビエト・ポーランド戦争を題材にした作品である。バーベリは実際に，この戦争で英雄的な活躍を果たしたブジョンヌイの第一騎兵隊に記者として従軍し，その後の創作を見越して取材を行っていた。

その時に取材内容の記録として付けられていたのが，1920 年 6 月(一説には 7 月)から 9 月に掛けての日記である。バーベリは，従軍中に出くわした創作の素材となるべき事件や人物をこれに書き付け，それらを元に『騎兵隊』に収録されることになる作品群を執筆したのである。

そこで，日記に書かれている内容=事実と，作品に書かれている内容=創作との比較を行うことで,そこにどのような加工がなされているのかを検証する。ここで比較の対象とするものは，登場人物である。作品『騎兵隊』の中には，日記中にも見られる人物名が登場人物の名前として登場する。これをその登場人物のモデルとして抽出し，それぞれを比較する。

『騎兵隊』の登場人物たちは,『騎兵隊』におけるバーベリの創作意図を雄弁に語るものとして存在している。転戦を繰り返しながらの各地で彼の心に刻み込まれた現実が，作品の中でどのように再現されているのか。このバーベリの構築した作品世界の中で生きている登場人物たちは，その世界で活躍するにふさわしい形象を与えられている。

登場人物たちはどのような変容を経て『騎兵隊』の世界にやって来たのか。このことを考察することで,『騎兵隊』におけるバーベリの創作上の手法や特徴を明らかにしようとする。

（ひらが　ゆう，北海道大学院生）

【A12】『幸せなモスクワ』における身体毀損—プラトーノフにおける身体・空間把握の変遷

古川　哲

この研究は，アンドレイ・プラトーノフの，1920 年代から 1930 年代の小説に見られる世界観の連続性の一側面について考察を行う試みである。その際分析の重点を 1930 年代半ばに成立したとされる『幸せなモスクワ』に置く。

本発表では，この問題を追及するに当たり，ある直観的なイメージをモデルとして仮定し，それを作品において跡付けていくという手法がとられている。そのイメージは，物体が，その物体と比べて極めて大きな空間のなかで浮動しているというものである。そしてその物体は基本的に複数だが単数でもありえる。そしてそのイメージは物体と，その周囲の空間によって構成されている。より厳密に言えばそのイメージは，くっきりした輪郭を持つ物体と，それを含む場という二重性を持っている。そこから帰結するのは，このイメージは知覚と想像力の両方によって成立しているということである。本論文では，このイメージを「飛散する花粉のイメージ」と名づけた。そして，作品において一貫するものとしての飛散する花粉のイメージを，複数の作品を比べるためのモデルとして使い，複数の作品における漸進的な変化が考察されている。『幸せなモスクワ』以前の作品で言及されるのは，1926 年から 1935 年にかけてのプラトーノフの主要な中篇作品および長編作品である,『エーテルの道』『チェヴェングール』『土台穴』『ためになる』『ジャン』である。これら五つの作品を詳細に検討すると，飛散する花粉のイメージを規定するものとしてあげた四つの要素に，変化が生じていることがわかる。端的に言えば,『エーテルの道』では，人間が自然を操作する位置にあったが，『ジャン』では自然によって手を加えられる位置へと移行している。『ジャン』において，人間が自然を手段として扱う姿勢が消えてしまうわけではない。しかし，人間が自然界の一部であるという態度がはっきりと打ち出されている。『ジャン』では，対称性，あるいは相互性という関係性が生じているのだ。

この文脈において捉えたとき注目すべきことは,『幸せなモスクワ』において，主人公モスクワ・チェスノーヴァの経験する労働中の事故を初めとして，人間の身体の毀損というテーマが正面から扱われることである。本発表では,『幸せなモスクワ』における身体毀損の主題が上記の対称性あるいは相互性との関連においてもつ意味を考察する。

（ふるかわ　あきら，東京外国語大学）

【A13】ナポレオン戦争におけるマロース（冬の寒さ）の表象

越野　剛

1812 年のナポレオンのロシア遠征が失敗したのは，戦闘で負けたからではなく，冬の寒さに兵士たちが耐えられなかったからだとしばしば語られる。例えばフランス語の Général Hiver や英語の General Winter と同じように，日本語でも「冬将軍」という言葉が定着しているほどである。このような言説は日本史の元寇における「神風」をほうふつさせるところがあり，一種の戦争神話と考えることができる。ただしこの点についてのロシアにおける理解のされ方はそれほど単純ではない。デニス・ダヴィドフやミハイル・ザゴスキンのように戦争を体験した作家たちは，自然現象を勝因とみるような言説はロシア軍の英雄性をおとしめるものだと考えることが多かった。一方で戦時中に出たカリカチュアは，冬の寒さ（マロース）を愛国的な農民の姿で積極的に描いている。ロシア軍の勝利の要因をめぐる奇妙な表象のずれはどこに由来するものであろうか。

1812 年の同時代人たちは対ナポレオン戦争をしばしば「ナロードの戦争」と呼んだ。この場合のナロードという言葉は「国民」とも「民衆」とも取れる曖昧さを残しており，多くが農奴身分だった民衆が愛国的なロシア国民として戦争に参加したという意味が込められている。エリート層の眼差しは民衆を理想化する傾向があり，戦時中に多くの農民が地主に反乱を起こした事実は隠ぺいされる。このようなナロードの意味と役割をめぐる矛盾が，ナポレオン戦争における冬の表象の奇妙なずれをもたらしている。1812 年の愛国的な戦いの主体である貴族たちは自らをロシアの冬の寒さと結びつけることを拒否したが，ロシアの「内なる他者」である民衆が客体としてマロースの姿で描かれることは積極的に容認したのである。

（こしの　ごう，北海道大学）

【A14】『エウゲーニイ・オネーギン』における西洋古典—散文をめぐる「抒情的逸脱」を中心に

山下　大吾

ロシア文学史の中で古典的地位を占めるプーシキンは，語本来の意味の古典であるギリシア・ラテン文学の作品にリツェイ就学時から親しんでおり，その関心を死に至るまで抱き続けている。のみならず彼の作品には，創作の核となる表現技法，詩風の上でも，西洋古典の作品で感得される諸々の特徴と相通ずるという指摘も数多くなされている。本発表では，彼の代表作である『エヴゲーニイ・オネーギン』（以下 E.O.）のいわゆる「抒情的逸脱」と呼ばれる個所，すなわち作者であるプーシキンの思想や感情が吐露されている個所において西洋古典の果たしている役割を検討する。その中でも彼の散文に関する見解が述べられている個所において，その役割は特に大きいものと考えられる。

E.O.1 章 8 連では，4 行目と 9 行目に 2 つの наука が用いられている。9 行目に見られるものは，オウィディウスの著した Ars amatoria『恋愛指南』という題名を暗示するものと見てよい。しかしながらラテン語 ars のロシア語訳としては，その核となる「技術，技芸」という意味を鑑みると，искусство が最も自然なものと思われる。2 つの наука の意図的な用法には，題名のみならず，『恋愛指南』の冒頭部が深く関係している。さらに次連の空白連も，この先の「抒情的逸脱」を可能にするために不可欠なものであったと考えられる。

E.O.6 章の完成は 1826 年 12 月と想定されているが，散文への志向が語られる 43 連から 45 連までは，未完に終わったプーシキン初の散文小説となる『ピョートル大帝の黒奴』の執筆時期と同時期の翌年 8 月に脱稿されている。この箇所に関しては複数の解釈が出されているが，プーシキンがその初めての詩集の題辞に掲げたプロペルティウスの詩行，さらにその詩行が含まれる『哀歌』の 2 巻 10 歌全体を基にして記されたものという解釈を新たに提案したい。

E.O.8 章 1 連でプーシキンは，リツェイ時代を回想し詩人としての出自を語る中で，3 行目から 4 行目にかけてアープレイユスとキケローという二人の古代ローマの散文作家の名を挙げている。表面上あくまで簡潔なこの 2 行は，実際にはかなり複雑な過程を経た上で成立したことが確かめられる。その過程を検証し，加えて詩人の立場から，散文という新たな領域を開拓する時期に，古典技法を駆使して記されたこの 2 行に彼が何を託したのか明らかにする。

（やました　だいご，京都大学院生）

【A15】描かれない夢—1840 年代のドストエフスキー作品について

高橋　知之

1840 年代に青春時代を送ったドストエフスキーは，同時代の多くの知識人たちと同じく，ジョルジュ・サンドやフーリエに心酔するユートピア社会主義者として出発した。フーリエ主義を標榜するペトラシェフスキー・サークルに参加し，その弾圧事件に連座して捕えられ，シベリア流刑に処された。

ところが,熱烈なユートピアンであったにも関わらず,作家としてのドストエフスキーは，作品の中で自らのユートピア・ヴィジョンを描くことにかなり消極的であった。もちろん，ユートピアの夢は作品の随所に反映されている。しかし,それは常に夢想家の見る夢という形で,夢想家を通して断片的に現れるのみで，テクストの中で実体的に描かれることはない。

この特異な消極性は「小さな英雄」によく表れている。「小さな英雄」は美しい田園地帯を舞台に少年時代の思い出を描いている。無垢な子どもと田園の結合は当時の文学においてごく自然なものだった。例えばトルストイの『幼年時代』では，美しい自然の中で営まれる幼年期の平和な生活が描き出される。それは「黄金時代」であり,「地上の楽園」である。それに対し,「小さな英雄」の世界はそのような完成された楽園ではない。主人公の少年は孤独であり，理想的な人間のつながりを夢見ている。少年はユートピアの住人ではなく，むしろユートピアの希求者なのである。ドストエフスキーは,「子ども」と「田園」という典型的なモチーフを使いながら,「小さな英雄」の世界をユートピア空間として最後まで実体化させていない。ここにドストエフスキーの特異性があるように思われる。

おそらくドストエフスキーは「地上の楽園」の不可能性を潜在的にはすでに感知していた。しかし，その問題を直接俎上に載せるには，あまりにも若いユートピアンでありすぎたのではないか。小説の中で憧憬を込めてユートピアを描いてみせるほど積極的にもなれず，かといってその実現可能性を問うほど冷徹にもなれない。ユートピアの夢を実体的に描いた場合，そのような板挟みの状態に陥ることは免れ得ない。だからこそドストエフスキーは，ユートピアの夢を実体化せず，あくまでも夢見られるものに留めることで，自らの夢を守ろうとしたのだと考えられる。「描かれない夢」は，若いドストエフスキーのユートピアの夢をめぐる微妙な葛藤をあらわしているといえるだろう。

（たかはし　ともゆき，東京大学院生）

【A16】『未成年』における理念の無矛盾性について

坂中　紀夫

ドストエフスキイの長編小説『未成年』には，主人公が抱く理念について，理解が困難であるような説明が結末にある。主人公の一人称叙述によるこの作品では，冒頭で以下の記述が「自伝」であること，結末でその執筆が自身の理念の変容に帰結したことが告げられる。ここで言う理念とは，それにコミットする当事者がそれとの関連において行為の実現を選択・非選択するような規範のことである。『未成年』は「自伝」として設定されており，物語の時間は基本的に過去から現在（執筆時点）に進むので，その過程で主人公は多様な理念にコミットしえるが,「自伝」を総括するに際して自らの過去と現在の理念は「同じであるが，姿が全く異なる」と説明する。この記述は「A でない A が存在する」との言明と類比させうるもので，常識的には理解しがたい。これが単なる矛盾でないとすれば,「同一の異なる理念」とはいかにして可能であるのか。

「自伝」を書くとは，過去の自らの挙動を現在の時点から捉え直すことである。それは，過去の自己が理念的なるもの（目的や価値など）に準拠しつつ特定の意図的行為として実現させた身体的振舞いを，現在の自己がその振舞いに連鎖して生じた出来事も含めて観察・記述する営みである。この場合，行為の単位性は行為者の意図に関わらず状況に定位して画定されるので,「行為者の意図」と「行為者の為したこと」とは乖離しえる。過去の意図的行為は，現在の遡及的な視点からは，それとは別の意図的行為として観察されえるのだ(「私の振舞いは父に対し余りに不遜ではなかったか」といった反省)。そして，行為が理念と相関している以上，この再画定された行為も，それが準拠しただろう別の理念が措定される。これは，自己を物語る営みに，過去の理念と現在の再構成された理念との交錯が付随することを意味する。同一性と差異性の間での理念のこうした振動に,「同一の異なる理念」との関連性が窺われるが，これは行為者の意図が行為を定義するとの信念のもとでは生じ難い。それには，自分を「未成年」と規定するような，自らの振舞いを反省的に捉え直す視点が求められるのである。『未成年』の一人称叙述は意識的に採用された形式であり，その意味でこの作品には自己を物語ることへの作者の理解が現れている。これに勘案すれば，理念についての矛盾する記述を整合的に説明する試みにも意義が認められるものと思われる。

（さかなか　のりお，同志社大学）

【A17】アレクセイ・カラマーゾフの瞑想と「糸」の比喩：日本的概念「縁」との対照

加藤　純子

文学は哲学や精神分析学と並び,「心」を扱う方法論の一つであると言われている。ここで言う「心」とは，人間が脳によって思考する内容（または状態）のことである。ただし，文学には象徴的表現や比喩が含まれていることがあり，言葉の意味内容を解明し難いことがある。ドストエフスキーの場合は，一方では「задумчив」，「задумчивый」などの語句を繰り返し,「瞑想的」または「沈思黙考」と訳しうる状態を書いている（アレクセイ，カルガーノフ，ドミートリイの例)。また他方では，特定の対象（祈りの言葉など）に集中しようとする行為を描き,「瞑想」と呼びうる行為の中で思考の混乱が鎮まったような状態を記している（アレクセイの例)。特に，アレクセイの場合には，祈り初めて間もなくまどろみ始め，グルーシェニカから聞いたばかりの「ねぎ」の話を思い出す。また，この瞑想のような状態の後には，世界からの(複数の)「糸」と接触したかのような体験をする。

近年では，「『カラマーゾフ兄弟』における沈黙」（Малькольм Джоунс，2007）のように，ロシア正教の伝統との関連で「沈黙」や「物思い」を論じたり，宗教哲学的観点から「糸」の比喩を含む記述を解明したりする研究が報告されている。しかし,「瞑想」のような状態を心理学的観点から考察した報告は，まだ十分とは言い難い。

そこで，本報告では『カラマーゾフ兄弟』を文学研究の立場から分析し，作品中の「瞑想」や「糸」の比喩といった表現の意味内容を解明することにより,「心」の動きを知るための一助とすることを目的とする。方法としては,『カラマーゾフ兄弟』に記された「瞑想」について主に心理学的観点から考察する。具体的には，原文等の資料を調べ，以下の点を確認してゆく。

1）瞑想についての直接的な記述を確認する。

2）瞑想の前後の文脈において密接に関連していると考えられる記述,「糸」の比喩について考察する。

課題は以下の点である。

1）アレクセイ・カラマーゾフの瞑想は，他の瞑想的人物の思考の状態とどのように違っているのか。

2）アレクセイ・カラマーゾフが瞑想の後で体験した，世界からの（複数の)「糸」との接触を日本的概念「縁」との対照によって説明できないか。

これらの課題を上記の作業によって検証したい。

（かとう　じゅんこ，大阪大学）

【B01】ロシア語における“Vt sebya”と“Vt-sya”の対応性について

コベルニック・ナディヤ

本発表では，「ロシア語のナショナルコーパス」(http://www.ruscorpora.ru/)のデータベースを用いて他動詞と“sebya”/“-sya”の結合性，そして“Vt sebya”と“Vt-sya”の対応性を試みる。その際，“Vt sebya”を中心にコーパス調査を行い，“Vt sebya”の 200 異なり数を抽出し，更に抽出された“V sebya”の相動詞(Vt)を基に-sya 動詞（”Vt-sya”）を形成し，その用例をコーパスから抽出する。得られたデータを基に，他動詞と“sebya”/“-sya”の結合性，そして“Vt sebya”と“Vt-sya”の対応性についてヴォイス及び意味の観点から実証的に論じる。

調査の結果から，他動詞と“sebya”/“-sya”の結合性は，“Vt sebya”の場合は 100%であるのに対し，“Vt-sya”の場合は 96%,つまり 4%低いということが明らかになった。なお，“Vt sebya”と“Vt-sya”の対応性は，ヴォイスの観点から，“V[act.v.] sebya”の 100%に対し，“V[act.v.] sebya”と同じ相動詞(Vt)を基にしている-sya 動詞は，能動態の形式を持つものは 200 異なり数の内 82.5%を占めることが明らかになった。更に，意味の観点から，“Vt sebya”と“Vt-sya”の対応性は約 39.4%であることが分かった。

（コベルニック　ナディヤ，東京外国語大学院生）

【B02】古代教会スラブ語および古代ロシア語の分詞の誤用について

恩田　義徳

古代教会スラブ語や古代ロシア語において分詞は豊かな形態変化を持ち，名詞に一致する事で，動詞によって表される動作の付随的な動作を表す機能を持っていた。(1)は Codex Assemanius からの例。例文中下線は分詞，点下線は動詞を表す。

(1) razgněvavъ že sę. ne xotěašę vъniti. ocъ že ego išedъ mǫlěašę i.
［（兄は）怒って家に入ろうとはせず，父親が出てきてなだめた。］(Lk. 15.28)

ところが分詞 razgněvavъ と動詞である xotěaše の間に，本来不要である接続詞 i が入り込み，分詞と述語と並列的に置かれている例が見られる。(2)は Savvina kniga からの例。

(2) razgněvavъ že sę i ne xotěšę vъniti. ocъ že ego išъdъ mǫlěšę i.

元来，分詞は名詞と関係するものであるから，この用法は論理的には誤りであると考えられる。このような分詞の誤用がいかなる要因によって引き起こされるのか筆者は古代ロシア語のテキストである，コンスタンティノス一代記 Vita Constantini を題材として検証した。その結果，この分詞の誤用の多くが過去分詞であること，さらに分詞＋接続詞＋動詞という語順で起こる場合が多く，それ以外ではほとんど誤用が起こらないことを確認した。現在分詞は動詞によってあらわされる動作と同時に起こる動作を示すのに対し，過去分詞は動詞による動作に先行する動作を表すものであるから，過去分詞＋動詞で表される動作の順番は動詞の過去時制を用いても表す事ができる。動詞（過去時制）＋接続詞＋動詞（過去時制）。動作の順番という点での類似する二つの構造を意味的に解釈し，混同したことが分詞＋接続詞＋動詞という誤用に繋がったと考えられる。

本研究ではこのような分詞の誤用が古代教会スラブ語の福音書においてはどのような状況にあるのか，その有無（数量），出現状況についてを複数の写本のテキストを比較しながら検討する。

（おんだ　よしのり，東京外国語大学院生）

【B03】Инновации в преподавании РКИ (разработка урока по теме «Телефон»)

Шатохина Г. С.

«Инновация – это эликсир жизни» - эти слова принадлежат генеральному директору немецкого промышленного конгломерата Siemens Генриху фон Пиреру.

Что же нового может предложить преподаватель русского языка японским учащимся, которым приходится изучать русский язык вне языковой среды?

В японских группах на всех этапах обучения активно используются спонтанные телефонные разговоры, записанные от носителей русского языка в естественных условиях.

При овладении устной иностранной речью слушать и слышать иной раз бывает труднее, чем говорить на неродном языке. Задача преподавателя РКИ – максимально облегчить эту задачу своим ученикам, помочь им снизить речевой барьер при восприятии русской звучащей речи.

Я не могу согласиться с теми из коллег, кто считает, что на начальном этапе обучения не стоит предлагать для аудирования непонятный учащимся по содержанию материал. Вот тогда-то и надо слушать, когда ничего непонятно!!! Своим ученикам я обычно говорю: «А разве вы всё понимали, что говорят на вашем родном японском языке, когда были грудными младенцами? Вы научились понимать по-японски, слушая язык каждый день. Только потом вы научились говорить, читать и писать, а сначала вы только слушали!» Над этим они никогда раньше не задумывались. Вот вам и мотивация!

Телефонный разговор – это специфическая форма человеческой коммуникации, так как значительная часть невербальных сигналов говорящего не доходит до слушателя: он не видит лица, жестов собеседника, голос часто бывает искажен. Многие люди именно поэтому не любят телефонные разговоры.

Психолог Р. Бердвистелл обнаружил, что вербальный компонент речи составляет 35 %, а невербальный – 65 %. Похожие данные мы встречаем и у А. Мерабяна, подсчитавшего, что словесная сторона коммуникации занимает в среднем всего 7 %, звуки и интонация – 38 %, остальные 55 % – это невербальная коммуникация. Эти данные подтверждают насколько необходимо учить иностранцев воспринимать текст без опоры на невербальную сторону коммуникации.

（シャトヒナ　ガンナ，外務省研修所）

【B04】Практическая подготовка билингвальных учащихся в европейских учебных заведениях

Клочков Юрий

Изучение языков всегда привлекало к себе пристальное внимание. Начало XXI века ознаменовалось беспрецедентным распространением билингвизма и полилингвизма (многоязычия) во всем мире, наряду со стремлением к поиску единого языка международного общения (английского языка). Под многоязычием понимается употребление нескольких языков в пределах определенной социальной общности (например, в государстве); употребление индивидуумом (группой людей) нескольких языков. Каждый язык употребляется в соответствии с конкретной коммуникативной ситуацией. Случаи массового владения тремя и более языками относительно редки. Многоязычие реализуется чаще всего в форме двуязычия – билингвизма.

Билингвизм может иметь как естественный, так и искусственный характер. Первый случай может быть вызван тем, что кто-то из родителей учащегося является носителем изучаемого языка, который стали изучать в школе их дети или он является для них вторым по важности после родного языка. Во втором случае искусственный билингвизм в большей степени развивается и укрепляется через преподавание иностранных языков в школе, в учебном заведении.

В европейских странах в учебных заведениях осуществляется подготовка билингвов на всех ступенях образования: от начала обучения в школах до окончания вузов. При этом в зависимости от направленности обучения и его мотивации уровень знаний билингвов может варьироваться от владения простыми навыками иностранного языка и умениями немного объясняться на нем до полного, совершенного владения вторым языком. Например, в Финляндии все школьники изучают шведский язык, но лишь малое количество учащихся умеет говорить на нем. В специальных европейских языковых школах и вузах уровень знаний изучаемых языков высокий.

В последние годы в России и других европейских странах наблюдается общая тенденция в пользу изучения английского языка. Важнейшей составляющей билингвального обучения является изучение культуры народа говорящего на данном языке, изучение лингвострановедения и страноведения.

（クロチコフ　ユーリー，駒沢大学）

【B05】Russian Phatic Interjections: Development and Functions

Petrishcheva Nina

The object of my presentation is primary and secondary phatic interjections in the Russian language. Phatic interjections serve to establish, maintain and finish communicative contact smoothly. After Ameka, on the semantic aspect I distinguish between primary and secondary interjections. Primary interjections form a closed class and can be used as utterances by themselves. Secondary interjections are open-class elements that can be used as interjections and in this capacity refer to mental acts of the speaker. The primary interjections analyzed are NU, AGA, DA and the secondary ones are KONECHNO and HOROSHO.

My research had three aims: 1) to investigate how open-class elements can enter the closed-class category of interjections; 2) to define conditions which distinguish between the discourse-marker (DM) and speech-act (SA) functions of phatic interjections; 3) to identify types of DMs and SAs the interjections can belong to.

I found that Russian secondary phatic interjections entered this closed-class category through grammaticalization process following the general path, established by Traugott and Dasher for English and Japanese interjections: predicate adverb > sentential adverb > discourse marker. The DM and SA functions of interjections depend on the place they occupy with respect to the structure of communication scenario. A communication scenario is communicants' knowledge, based on previous experience, of a specific sequence of actions (both verbal and non-verbal) that is most likely to take place in a specific situation of communication. The interjections serve as DMs if they are used scenario–externally and serve as SAs when used scenario–internally. The types of DMs and SAs Russian interjections belong to are interjection-specific, but some parallels can be observed if one compares Russian phatic interjections to the same category in the English and Japanese languages.

（ペトリーシチェヴァ　ニーナ，中京大学）

【B06】ロシア語命令法における命令動作の動作主—『イワン・デニーソヴィッチの一日』の中で

福安　佳子

本発表では，*Один день Ивана Денисовича* における命令法，作者 Солженицын 自身によるこの小説の音読の録音を資料として，Gulag 内における命令文の中で，命令動作の動作主（the Agent of the Directive Action）が，どのような機能を担って用いられているかを考察する。命令動作の動作主は，一部の研究者によっては「命令文の主語」としてみなされている。このカテゴリーと，「呼格」のカテゴリーを区別した上で，前者が命令文に付加されることによって，どのような発話内行為（illocutionary act）が生じるかを，Searle (1970, 1975) の speech acts 理論をもとに比較考察する。

従来，Шахматов，Пешковский，Виноградов 等，ロシアの研究者によって抽象的に説明されていた“命令の意味を和らげる”，または“命令の意味を強める”機能がなぜ生じるのかを，発話内行為の違いによって具体的に論じることを試みる。

（ふくやす　よしこ，
カリフォルニア大学ロサンジェルス校大学院生）

【B07】命令文とモダリティ

村越律子

— Вы опоздали на поезд? — Да, теперь *жди* следующего; *Объясняй* тебе! Ты же совсем не слушаешь; *Почитай* тут! Все время телефонные звонки. これらの例における命令文の用法は，通常の命令文とは異なり，話し手が聞き手に指示を与えるのではなく，話し手以外の第三者（会社の上司，自然，運命，成り行き，神など）が話し手に行為の実現を要求し，それに対して話し手が何らかの反応を示す，という構図で説明される。その際，話し手の反応にモダリティが関与する（「次の列車を待たなければならない」－必要性：deontic modality；「君に説明しても無駄だ」－無意味，不必要：deontic modality；「読書なんかできない」－不可能：dynamic modality）。上のような文は会話や文学作品によく見られる。別の例：Ну, я допускаю, *руби* (= можно рубить) леса из нужды, но зачем истреблять их? — А. Чехов.

論点：

① 命令形にモダリティが関わるプロセスをどのように説明したらよいだろうか。その動機づけと制約を，命令文の命題としての不完結性と最近注目されている「力のダイナミックス」（force dynamics）の考え方によって明らかにしてみたい。

② 従来の立場では，上のような用法は命令形の特別な用法（особое употребление）とみなされてきた。しかしながら，ロシア語においては命令形とモダリティは緊密な関係にある。相関的に用いられる頻度も高い。上のような命令文と通常の命令文を統一的に説明するためには，二人称単数形（читай）と二人称複数形（читайте）の非対称性を認めなければならないだろう。читай をゼロ形式（нулевая форма）と考える可能性についても触れたい。

（むらこし　りつこ，上智大学）

【B08】ロシア語の間接話法における de dicto のモダリティ

世利　彰規

言語学におけるモダリティとは，発話者の発話されたものごとや事実に対する態度を表す。動詞におけるムード（法）はモダリティの一部に含まれる。

ロシア語の文法においてモダリティは時制や人称とともに述定（предикативность）を構成する要素である。70 年文法によると，述定はロシア語の文を定義する上で重要な役割を果たす。

従来の英語などの研究で主に扱われるのは，deontic（義務），alethic（可能性），epistemic（知識や信念），boulomatic（願望）のモダリティであった。今回の発表では，de dicto（語られたものごと）についてのモダリティについて取り扱う。ほかのモダリティの意味が，発言者自身の意見や態度をもっぱら表すのに対し，de dicto のモダリティによって発話者以外の意見などもまた表される。これはテクストにおける発話者の視点や直示の問題に関係する。

モダリティを考える上で次のことに注意しなくてはならない。ムードとしての形式的な分類（直説法，接続法，命令法など）と意味的な分類を区別しなければならない。一般に形式的分類よりも意分的分類の方が多い。

ドイツ語やラテン語において間接話法の従属節内で，動詞の形が接続法に変えられるという規則がある。この接続法は，引用された他人の発言内容が事実であると断定しない発話者の態度を表している。

ロシア語の間接話法においても，ドイツ語やラテン語と同様に，特別なモダリティ的意味が存在している。その根拠は非引用性（нецитируемость）という現象である。この現象によると，ロシア語の間接話法の従属節内で，主観的モダリティをあらわす挿入語を置くことはできない。ここからロシア語の間接話法の従属節においても主節とは異なるモダリティの働きがあると考えることができる。

ロシア語の間接話法におけるモダリティの意味は，動詞のムードによって表されるとは考えられない。なぜならば，ロシア語においてムードのカテゴリーは未発達であり，ドイツ語やラテン語の接続法に見られるような明確な規則が認められないからである。

間接話法における接続法がどのような意味を表しているかについて考えてみる。ドイツ語・ラテン語における間接話法中の接続法は，発話内容が事実であると断定しない話者の中立的態度を意味する。

以上の点を踏まえて，さらにロシア語の間接話法における de dicto のモダリティの機能について考察していく。

（せり　あきのり，東京大学院生）

【C01】声楽作品におけるグリーンカの「保守性」～同時代のアリャービエフ，ダルゴムィーシスキイとの比較を通して～

一柳　富美子

ミハイール・グリーンカ（1804～56）に関するロシアでの歴史的評価は，ここ 20 年で大きく変わり，「グリーンカから国民楽派が始まる」という解釈は過去のものとなりつつある。ソ連時代のイデオロギーの呪縛から解放されて，実際にグリーンカが残した音楽を客観的に分析・批判できるようになり，同時に，グリーンカ前史や同時代人の研究が急速に進んできたからである。ロシア国民楽派はグリーンカ一人の功績で始まったわけではない。

ロシアのこうした趨勢とは別に，20 年以上取り組んでいる「統音論（ロシア音楽における言葉と旋律の有機的関係）」を通して，発表者はグリーンカ音楽見直しの必要性を痛感していた。本論では，実際に演奏と音楽教育の現場で仕事をしている立場から，グリーンカの全声楽作品の楽譜を分析・演奏した結果をまとめて，いかにグリーンカがロシア語の扱いを軽視していたかを具体的に紹介する。そしてそれは，決して時代の共通様式ではなくグリーンカ個人の欠点であることを，先輩であるアリャービエフ（1787～1851）及び少し後輩のダルゴムィーシスキイ（1813～69）の声楽作品と比較して解説し，国民楽派の先駆者として賛美されてきたグリーンカが，少なくとも歌曲においてはむしろ極めて保守的であったことを明らかにする。例えば，音楽形式に無理矢理ロシア語を流し込んだために，力点の無い形容詞語尾や接続詞・前置詞が第１強拍に置かれることがしばしばあり，不自然に響くだけでなく歌いにくい一因にもなっている。特に初期作品にこの傾向が強い。また，１母音に１音符対応という国民楽派以降のロシア声楽曲の原則にも殆ど当て嵌まっていない。

かつては発表者もグリーンカ礼賛者だった。客観的なデータ（楽譜）を分析した今，改めてグリーンカの短所長所を確認しただけでなく，同時に他の音楽家たちの先進性が見え始め，ロシア音楽史への興味がさらに増している。この面白さを，是非，ロシア文学研究者の皆さんと共有したい。

（ひとつやなぎ　ふみこ，東京芸術大学）

【C02】絵画から演劇へ―ニコライ・タラブーキンのメイエルホリド論

上田　洋子

美術史家ニコライ・タラブーキン（1889-1956）は，日本では「絵画理論の試み」(1916)「イーゼルから絵画へ」(1923）などにおける，アヴァンギャルド美術の新しい方向の査定とフォルマリズム的アプローチによって知られている。タラブーキンは高等芸術工房ヴフテマスやプロレタリア文化教育機関プロレトクリトで教鞭をとるかたわら，1924 年頃からメイエルホリドの国立実験工房ゲクステマスでも美術史の講義を持っていた。ロシア国立文書館メイエルホリド劇場アーカイヴにはゲクステマスでの彼の講義のプログラムと概要が保管されており（РГАЛИ 963.1.1332)，古代から同時代までの美術史を，ファクトゥーラ，コンポジション，空間，それにジャンル，様式，社会とのかかわりなど，さまざまな角度からの形式的分析を通して教えていたことがわかる。フォルマリズム批判が強まった 1930 年代後半から晩年にかけては国立演劇大学ギチスの教員の職にあったが，そこでタラブーキンに学んだジンゲルマンやバチェルスは，彼が社会主義リアリズムの要請を考慮に入れることなく，フォルムの分析から美術史を説明し続けたと証言している。

メイエルホリドはスタニスラフスキー同様，ミザンセーヌ（舞台上の配置と動き）を厳密に指定して，舞台の各場面を（言葉のもっとも広い意味での)「絵」として作り込むことを行った最初の演出家の一人である。舞台空間を構成する際，この演出家がさまざまな画家たちと共同作業を行い，また，過去の巨匠の絵画の構造を取り入れていたことはよく知られている。タラブーキンも，例えば『検察官』稽古の折に俳優たちに美術館で 1830 年代ロシアに関する講義をするなど，美術の側から創造に関わっている。彼はメイエルホリドを高く評価し，『知恵の悲しみ』(1928)『スペードの女王』(1935）などの舞台空間を分析した 4 本の論文を著わし，また『検察官』（1926）のミザンセーヌの詳細なメモを残している。論集『N.M.タラブーキンの V.E.メイエルホリド論』(1998, 国立芸術研究所）に明らかなように，三次元空間を平面絵画のごとくに分析したこれらの資料は，平面化された舞台写真を手掛かりに作品の立体的想起を試みる際，大きな助けとなる。

本発表ではタラブーキンのメイエルホリド論を，彼の他の著作やアーカイヴ資料を参考にしつつ読み解き，劇評や写真資料などと比較しつつその有効性を検証する。同時に，メイエルホリドの作品における美術の要素について再考したい。

（うえだ　ようこ，早稲田大学）

【C03】生産主義の広告論とロトチェンコのグラフィックデザイン

河村　彩

1923 年，構成主義デザイナーのアレクサンドル・ロトチェンコと詩人のヴラジーミル・マヤコフスキーは「広告―コンストラクター　マヤコフスキー―ロトチェンコ」の商標を付した広告を次々に制作する。ネップ期における商業文化の繁栄を背景に，彼らが制作に関わった広告はグム（国営デパート）やモスセリプロム(モスクワ農業協同組合)，国立出版局など多岐にわたる。これらのポスターは，簡潔な色彩，事物の即物的な提示，矢印などの記号の使用，コピーと造形の緊密な結びつきといった特徴を持ち，インパクトの強さによって見る者の眼を惹きつける。

一方，生産主義の理論家たちの中には広告論に取り組んだ者もいる。例えばボリス・アルヴァートフは，芸術や工業生産といった区別を超え，人間と物質との関係を「事物の文化」という概念によって把握することを試みた。彼はこの観点から「芸術と工芸」(『ソヴィエト芸術』1926 年，第 1 号)においてブルジョワの社会における商品とその広告を分析している。またニコライ・タラブーキンは『今日の芸術』(1925 年）において，広告，ポスター，新聞，書籍のデザイン，写真などの「日常の実践的側面」と結びついた「芸術」をとりあげ，生産主義のグラフィックデザイン論を展開する。さらに，ヴィクトル・ペルツォフは「言葉―視覚的イメージ―未来」(『プロレトクリトの論文集』1925 年）において，「時間の機能」を持つ言葉や文学は「空間の機能」を持つ「視覚的イメージ」によって補われ複雑化される必要があると考え，それを実現するのが広告であると主張する。これらの理論家たちとロトチェンコはインフク(芸術文化研究所)，ヴフテマス（高等芸術・技術工房)，雑誌『レフ』，プロレトクリト（プロレタリア文化・啓蒙組織協会）などで活動を共にしていた。

本発表では，これまであまり取り上げられることの無かった生産主義の広告論に焦点をあてて考察する。それと同時に，ロトチェンコとマヤコフスキーの広告における造形的特徴や，コピー（文字テキスト）とデザイン（イメージ）の結びつきに関して分析を行い，生産主義の広告論との造形的手法および広告に対する理念の共通性を明らかにする。

（かわむら　あや，早稲田大学）

【C04】異教神ヴォロスの月神としての一機能

中堀　正洋

スラヴ民族は，キリスト教を受容するまでは無文字社会であり，修道院や教会において文字を用いる聖職者など一部の特権的階層を除き，民衆の多くは文字を持たなかった。そのため，キリスト教化以前の原始的な宗教形態や体系は文字として記録されておらず，スラヴ神話は中世の年代記文献や外国人旅行者の間接的な記録といった資料をもとに，比較神話学や比較言語学の理論を援用し，考古学的な調査や民俗資料の分析による物質文化の検討をとおして，複合的な視座から再建されなければならない。

19 世紀のロシアの神話学派は，スラヴ神話の全体像の再建を目指し，異教の神々を太陽を中心とした天体や自然現象と結びつけて解釈しようと試みた。しかし，神話学派の一連の仕事は，例えば A.N.ヴェセロフスキイ，E.V.アーニチコフ，N.M.ガリコフスキイら神話学派に否定的な立場を取る研究者たちによって，天体への強引なこじつけと見なされ，異教的観念を飾り立てようとする危険性を孕むとして批判の対象とされた。

キリスト教化以後，異教の神々の機能は聖者の機能と習合し，ヴォロスの機能も同様に聖ヴラーシイに受け継がれ，家畜の守護神としての機能だけがクローズアップされたかに見える。ところが，神話学派は，異教の神々の機能を天空と関連づけて解釈し，ヴォロスも同様に天空神として解釈しようした。しかし，神話学派への批判以降，ヴォロスを天体との観点から論じる研究は散見されず，ヴォロスを天空神とする解釈は既に忘れ去られたかのような印象さえ受けかねない。

スラヴ神話の再建作業は，資料が間接的かつ限定的なために，20 世紀初頭までに既に行い尽くされた感があり，これ以上の成果を求めることは困難にも思われる。しかし，だからこそ現代において，示唆に富んだ神話学派の研究成果を改めて検討し，再評価してよいのではなかろうか。

本報告では，ギリシア神話，俗信や成句，ロシア語の方言語彙，比較言語学的資料などの諸資料を用い，異教神ヴォロスと天体，特にプレアデス星団との関係を探る。そして，星座に象徴される脱穀の形象，星座と毛髪の関係における豊饒多産性，黄金に表象される異界とヴォロスの関係性といった観点からヴォロスの機能を考察し，かつてヴォロスが天空における月神となり，そこから派生的に農耕の守護神，死者の世界の守護神ともなりえたことを明らかにしたい。

（なかほり　まさひろ，慶應義塾大学）

【C05】アレクサンドル・ブロークと古儀式派：『十二』における救世主の呼称をめぐって

塚田　力

詩人アレクサンドル・ブローク（1880-1921）により革命のさなかの 1918 年 1 月に発表された叙事詩『十二』は，多くの評者により彼の代表作とされている。本作品の末尾においてブロークは救世主の名を，一般的なつづりである「Иисус Христос」ではなく，ブローク自身は古儀式派の信徒ではないにもかかわらず，正教古儀式派式に「Исус Христос」とつづっている。

『十二』はボリシェビキにより好意的に取り上げられ，広く流布された。トロツキーは『文学と革命』（1924）において，『十二』を「われわれの時代の最高傑作」と評し，ブロークが『十二』により十月革命の圏内に参加してきたと記した。ボリシェビキは古儀式派と必ずしも敵対していたわけではない。カリーニンを初めとする複数の古儀式派の家系の出身者が党最高幹部として革命に参加しており，一方，古儀式派の一部は革命への共感を示していた。主流派教会の権威の失墜という時代的背景において，『十二』における「Исус Христос」というつづりは，それが国家と緊密に結びついてきた主流派教会の奉じる救世主ではないことを表現するものと理解されてきた。

しかし，当時の主流派正教会側の観点に立てば，救世主の名はあくまでも「Иисус Христос」であり，「Исус Христос」と呼ばれる存在は偽キリストに他ならず，「Исус Христос」とつづる者たちは異端である。ブロークが古儀式派式のつづりを用いたことを根拠とし，彼が『十二』において革命を偽キリストの到来として描いていると読み解く者も現れている。

本発表では，古儀式派出身の詩人であるニコライ・クリューエフ（1884-1937）との交流を中心にブロークと古儀式派及び鞭身派等のキリスト教諸教派の関係を概観するとともに，『十二』が古儀式派との関連においてどのように読まれてきたかを紹介したい。

（つかだ　つとむ，北海道大学院生）

ワークショップ

【W-1】Карнавал революции: гротеск и советская культура 1920－1930-х годов

Одной из особенностей советской культуры послереволюционного периода является интенсивное использование в ней карнавальных и гротескных элементов. Ведущие писатели того времени (Булгаков, Платонов, Хармс и многие другие) запечатлели дух эпохи в ярких гротескных и сатирических образах. О центральном значении гротескного восприятия мира говорит и тот факт, что именно в это время Михаил Бахтин обратился к разработке теории гротеска.

В данной секции предполагается рассмотреть приемы и функции гротескной образности в произведениях советской художественной культуры 1920-30-х годов, а также определить ее место в контексте между классической русской литературой XIX века и постперестроечной культурной ситуацией, в которой тема гротеска вновь стала одной из ведущих.

Гротеск в драматургии А. Платонова в контексте театрального искусства 20-30-х годов

Мурата Синъити（Токио）

Платоновские пьесы составляют существенный и очень характерный аспект творчества этого писателя. Их изучение может значительно дополнить наш взгляд на своеобразие его художественного мира. Одним из характерных приемов, которым Платонов пользуется в своем драматургическом творчестве, является гротеск. По степени интенсивности использования гротескной образности пьесы Платонова нередко превосходят его рассказы и повести.

Доклад посвящен методологическим вопросам исследования пьес А. Платонова «Шарманка» и «14 красных избушек» в сопоставлении с изучением пьес других русских драматургов 20-30-х годов XX века. В этой связи можно назвать имена М. Булгакова, Н. Эрдмана, А. Введенского, Д. Хармса, Е. Шварца, оказавших немаловажное влияние на развитие русского и мирового театра. В докладе рассматриваются приемы и функции гротеска, связь гротескных метафор с абсурдом и сатирой, которые также являются весьма характерными для драматургии этого периода. Кроме того, рассматриваются следующие вопросы: специфика пьес А. Платонова, отличие пьес от прозы писателя, разнообразные проявления эксцентрики, элементов цирка, искажений языка, близких к зауми, сценичность платоновских пьес.

Гротеск в советском кино 20-30-х годов

Корнелия Ичин (Белград)

Помимо агитационных и документальных кинокартин, в начале советского кино снималось много кинокомедий, в которых смех был поставлен "на службу революции". Одним из первых шедевров советского кино стала картина «Необычайные приключения мистера Веста в стране большевиков» Кулешова, снятая в 1924 году. Острый российский гротеск сочетался здесь с приемами американской "комической" кинематографии, особенно в области монтажа.

Поскольку в советском кинематографе смех должен быть непременно "полезным" для общества, советская сатирическая комедия увлекается гротеском Гоголя, Салтыкова-Щедрина, Сухово-Кобылина. Используя новые художественные приемы, режиссеры пытаются следовать литературной традиции во избежание цензуры, которая строго следит за тем, чтобы в сатире и гротеске не было и оттенка высмеивания нового государственного строя.

С другой стороны, в 1934 Медведкин организовал «кинопоезд» - киностудию на колесах, созданную по принципу «Сегодня снимаем – завтра показываем». Этот «поезд» разоблачал безалаберность, бесхозяйственность, срывы планов. Умение изобличать бюрократизм и лень в форме комедии, построенной на эксцентрике и гротеске, стало свежим веянием в советском кинематографе.

Метаморфозы «нового человека»: мотив очеловечивания зверя в советском искусстве 1920-х годов

Валерий Гречко (Токио)

Превращение зверя в человека в результате хирургической операции стало популярным мотивом в советском искусстве 1920-х годов. Наряду с широко известной повестью Михаила Булгакова «Собачье сердце» в этой связи можно также назвать пьесу «Пао-Пао» Ильи Сельвинского, незаконченную оперу Дмитрия Шостаковича «Оранго» и т. д. С одной стороны, этот интерес может быть объяснен развитием физиологии, медицины и других наук (см., например, опыты по созданию гибрида обезьяны и человека, проводившиеся в то время зоологом Ильей Ивановым). С другой стороны, этот мотив обнаруживает прямые параллели с утопическими идеями создания «нового человека», которые составляли важную часть идеологической дискуссии в послереволюционный период. В докладе анализируется использование гротескной метафоры как остраняющего приема, позволяющего посмотреть на человека из «внешней перспективы» и осмыслить моральную и идеологическую практику новой советской реальности. Показано, как средства гротеска связаны с сатирой на официальные идеологические клише и пропаганду.

【W-2】ロシア文学研究の先駆者，昇曙夢を語る

昇曙夢(1878～1958)は明治28年3月奄美大島を出郷，29 年 9 月『ニコライ神学校』に入学，同 36 年同校を卒業。翌年文豪評伝『ゴーゴリ』を出版。続いて『露西亜文学研究』(明 40) を刊行。文壇・学界で好評を博した。42 年 5 月私淑し敬愛していた二葉亭四迷が，ロシアからの帰国途上インド洋上で客死した。痛惜の涙にくれた曙夢は二葉亭の遺髪を継ぐ形でロシア文学研究に邁進した。

42 年頃からアンドレーエフ，アルツィバーシェフ，ソログープ，バリモント，ザイツェフ，クプリーンなどに代表される「ロシアモダニズム」派に属する同時代作家の作品を驚くほどの感度のよさで精選し翻訳した。それらは雑誌『趣味』・『早稲田文学』・『文章世界』・『新文芸』等の巻頭を飾り新文学の息吹を伝えた。

ロシア同時代の最新の名作を収載した曙夢の翻訳集『六人集』(明 43)・『毒の園』(明 45) は明治末期の文壇に旋風を巻き起こし，自然主義文学の閉塞感を打開する一つの要因になった。昇曙夢の翻訳文学は宇野浩二，広津和郎，葛西善蔵，谷崎精二，志賀直哉，谷崎潤一郎，小川未明，豊島与志雄，芥川龍之介等の若い世代に甚大な影響を与えている。またレフ・トルストイ歿後前後の動静を伝える昇の数多くの論説や談話は新聞・雑誌に掲載され，明治 44 年 1 月『偉人トルストイ伯』として刊行された。昇の『トルストイ十二講』(大 6) は版を重ね大正デモクラシーの時代思潮を牽引する重要な著作となっている。

後年，武者小路実篤は昇曙夢の『還暦記念 六人集と毒の園―附文壇諸家感想録―』のなかで明治末から大正初期にかけて「昇曙夢の時代」があったと指摘した。それはまた日本近代文学史上の「翻訳の時代」と重なっている。

明治・大正・昭和の初期を通じて，ロシア文学とロシア文化の移植紹介は昇曙夢の先駆的な業績に負っているところが多い。曙夢は「わが国の文学，芸術の発展，文化の進展に寄与している」(黒田辰男)。曙夢が扱った分野は文学のみならずロシア芸術全般を包含し，博洽広範な著述活動は他者の追随を許さない。まさにロシア研究の百科全書的存在として位置づけられると言えよう。

だが，これまで「ロシア文学者」も「国文学者」も「比較文学者」も昇曙夢に関する本格的な研究はほとんどしてこなかった。それゆえ近代日本文学史の捉え方に重大な欠落と偏向がまかり通ってきたのである。

2001 年 11 月に拙著『ロシア文学者昇曙夢＆芥川龍之介論考』(和泉書院) 刊行以来，微力ながら昇曙夢の顕彰に努めてきた。近年曙夢の業績を再評価する兆しが見えてきたことは嬉しいことである。2005 年 12 月曙夢の故郷奄美大島の瀬戸内町において「昇曙夢の歩んだ道」(町立図書館・資料館主催) 展があり，併せて中本信幸・源貴志両先生をお招きしてシンポジウムが開催された。

2007 年 5 月には『昇曙夢歿後 50 年を偲ぶシンポジウム』「昇曙夢の生涯と業績を語る」を中本信幸・沼野充義・加藤百合先生を奄美市名瀬に招請して純民間主導のシンポを開催することができた。翌年『記念誌』を刊行。これに関して平岡敏夫氏（筑波大学名誉教授）は「ロシア文学の受容・研究のみならず日本近代文学研究にとっても重要な記念碑である」(『文学史家の夢』) と評価。2009 年 11 月『原郷の奄美―ロシア文学者昇曙夢とその時代』（田代俊一郎著）の出版。本年 3 月に長谷部宗吉編による厳正詳密な『昇曙夢著作年譜 (稿)』[I]～[IV]が完結。4 月源貴志・塚本孝編『昇曙夢翻訳・著作選集』全 7 巻が復刻された。このように曙夢に対して熱い眼差しが向けられつつある現状を踏まえて曙夢の偉大な足跡を各自の視点から検証したい。

和田芳英（総合司会）

【パネリストの発表内容】

中本信幸（神奈川大学名誉教授）
エフレイノフ作『検察官』をめぐって
―ロシア・ソ連前衛劇紹介の先駆者昇曙夢

源貴志（早稲田大学教授）
『昇曙夢翻訳・著作選集』を編纂して
昇曙夢の翻訳・著作を通してロシア文化の幅広い解説者としての側面を再評価する

籾内裕子（早稲田大学非常勤講師）
昇曙夢の初期翻訳―「草場」について

南平かおり（早稲田大学・津田塾大学非常勤講師）
昇曙夢と日本児童文学―日本児童文学界におけるソログープ作品の紹介を巡って

和田芳英（昇曙夢研究家）
蘊奥を極めた昇曙夢のロシア文学研究
―昇曙夢研究から見えてきたもの―

【W-3】いま，ソ連文学を読み直すとは

ソ連崩壊から 20 年がたった。ソ連時代に生まれ育ったもの，またソ連とともに滅んだものや生き永らえたものを見直すとき，見る側の歴史的パースペクティヴが大きく変わっていることに気がつく。話題を文学に限っても，個々の作家の読み方やその文脈の変化はそれ自体，検討を要するレベルに達している。とりわけ問題になるのは「ソ連文学」という枠組そのものである。今日，この枠組はどのような意味内容をもち，どのような対象構成を許すのだろうか。ソ連文学／亡命文学，社会主義リアリズム／モダニズム（アヴァンギャルド），体制派／異論派…など，かつて決定的な意味をもっていた対立項が失効したかに見える現在，「ソ連文学」の枠組は「20 世紀ロシア文学」というより優勢な枠組に取って代わられる（あるいはその下位分類の一つになる）だけの存在だろうか。

こうした問題は一つの世代だけで論じるのでなく，複数の世代の知見をつなぎ合わせることによって，より生産的なテーマとなるだろう。本パネルでは 1960 年代以降のソ連文学とじかに付き合い，その息吹を後進に伝えてきた安井亮平先生をお迎えする。残り二人の報告者（中村・岩本）と司会（野中）は 1980 年代半ばにロシア文学を学び始め，ソ連崩壊以後の 20 年間に研究者としての自己形成を図ってきた世代である。対論者には，ソルジェニーツィンやショーロホフに関して新しい視点からの研究を進めるポスト・ソヴィエト世代の研究者，平松潤奈氏を迎える。異なる時代感覚のぶつかり合いをパネルの構成原理としたい。

司会：野中進（埼玉大学）
対論者：平松潤奈（東京大学）

ソ連文学者たちとの交遊を中心に

安井亮平（早稲田大学名誉教授）

クロポトキンやマヤコフスキーらにひかれ，1954 年早大露文科に入学し，それ以来今日まで半世紀以上にわたり，ロシアに係わってきた。1968 年からはほぼ隔年にロシアを訪れ，その変遷を見てきた。

今日お話しするのは，親しく交わった文学者や思想家や文学研究者を中心とした，ごく私的なロシア論である。

ソ連文学の一底流について

中村唯史（山形大学）

「ソヴェート文学」が日本の詩人・小説家に直接の影響を与えたのは，主として昭和戦前期までである。それ以降も 19 世紀ロシア文学を参照する作家は多かったが，同時代のソ連文学に対する注目は弱かった。ひとつにはそれは，特に「雪どけ」以降のソ連文学に見られた独特の神秘感・形而上性が，戦後の日本文学の問題意識と乖離していたためではないか。ベルゴリツの散文『昼の星』（1960 年刊）を中心に，当時のソ連文学の詩学を考えてみたい。

現代ロシアに生きるソヴィエト文学

岩本和久（稚内北星学園大学）

ロシアでは 21 世紀に入ってからも，ソ連期のロシア語文学やソ連作家の伝記が次々と刊行され続けている。ソヴィエト・ロシア文学は文学史や国民文化の一部と化したといっても過言ではあるまい。ここでは特に 2000 年以降にテレビ・ドラマ化され話題を呼んだアクショーノフ『モスクワ・サガ』(1991-92) やソルジェニーツィン『煉獄の中で』(1968) を中心に，現代ロシアにおけるソヴィエト期の文学の意味を考察したい。

以上の研究報告要旨は著者に無断で引用できない。
Not for quotation without the author's agreement.